

郵便
報知新聞
第四百六十三号

誠心赤坂の溜池ふれ 蓮花濁る深ね
 藝妓の梅吉其色と香ふ潮る中島精
 美か字びの道も何う疎く且夕ぬ色と酒と
 心と茶集の漫地の日と月と双親の嘆言
 大々くばと聴て愕然梅吉へ好男子にむかひ
 君青年あはすばい英飾獨會學向め
 心に留めぬ世にも稀なる博士と云れぬ
 異質多に賤妻が如き者よ心に感へあつた
 最情じと怨せに男は彼が赤心と感腹
 心に華め字の道に進む梅吉のつらさ
 ありと喜び己が細き緑竹の生活にて
 燈火の價を賈く男の益感激一洋
 する心替換て讀書せぬ勉勵しむ
 此ハ明治七年夏とくきうん

松林伯圓記



大福
芳年

金
寶
堂